

吉本宣子句集『木の春』より

木の春を人の容（かたち）に耐へてをり
八方に野火とびまはり父母の国
望郷の橋が一本箱庭に
青大和ころげ落おちたる頃の痣
山藤に煙吐く汽車あればなあ
夏山伏をりをり空(くう)を飛びにけり
雨乞ひのびしびし折れる炎かな
睡りゐる山姥十三(とき)の土塊なり
木に繋ぎおく夏蝶の怒り肩
睡りつつ凍滝鱗とばしたり
春愁地に落ちてゐるボールの尾
何頭も風を放ちぬ幣辛夷
薪能闇の四隅のめくれたる
男梅雨触れなば臍も猪首もあり
縄跳びのふと羽つかふ虚ろな子
虹消えて箒・ちりとり他(ほか)あらず
よもぎ青し少彦名命(すくなひこな)の尿青し
華巖とよ紺あさがほの色にせむ
空海の率みてゐたる桃・真鶉
くちなはを呼びしは大和の漆搔き
二日はや黒人(くろひと)の湖走り来る
あらくさ垂れし広島の後ろ背よ
稲の花ふやせふやせと闇が蒸す
嬰見上ぐはへとり蜘蛛の神々(こうごう)し
蛇衣を脱ぎよそほひをはじめたる
寒の鯉生きて地下街運ばるる
立ちづめの影老いやすし甘(あま)葛(かづら)
戦また夜盗道なり梅ひらく
白蓮の白より出でし塵ならむ
とても黒く竹咲き恋の終りたり
素の空に胸乳の匂ふ曼珠沙華
飲食の皿流れ着く天の川
鈴鳴るはこの世の縁(へり)や白遍路
秋澄むやおぼこの魂が目礼す
死に神の二翅六脚居て涼し
ぬかばへを叱りつつゆく黄泉の径